

○ 第拾回

却説家老阿部結城の筑前守殿入部の後引續て歸國せしが元來一番の機を吾手に握らん底意ありしに圖らず花里の依託を受ければ心竊かに打喜ひ花里の望の如く若殿と失ひて尋三郎を守立て是に依て威福と恣にせんものと頻に奸謀を廻らせしが事を成さず黨と結ぶにあり黨を結ぶに如何なる手段に依て可ならんかと日夜其事をのみ案じたり是より先談藩に諷習館とて藩士に文武を講習さする一校あり其技藝の進退に依て褒貶黜陟と行ひ以て藩士を獎勵せるが結城の豫て該館の總督を司れば之に依て黨を結び吾隱謀の助にせばやと平生已に阿諛する者をバ技藝の進退を問はず加増又ハ褒獎を與へたり我黨に引入る、目的一に我權威の行はる、や否やを試みしに勢に就き利に走るは人情の常なれば吾を先にと阿諛ひ多く己が黨に加はりければ愈志と得て勢ひさながら旭日の昇るが如し之に反對へ忠良の士ハ結城が此來の舉動依怙偏頗の沙汰多ければ威權を弄するの舉終に君家に禍せん事を懼れ密に慷慨の情に堪へねど黨派の勢力渠に劣るを以て事の行はれざる

を慮り誰とて其不可を喝するものな

く徒に悲憤の涙を吞こみ黙止する者多かりき是ぞ此結城が己が權勢を試むるの始めなりけり茲に又同藩の家老職を勤むる降家宗兵衛なる者といふ者あり祿三百五十石を領せり生來和漢の學を好み詩刊に書畫を能し其性寛仁温和常に君家を愛ふるの志深く曾子の所謂百里の命を寄せ六尺の孤を托するに足る君子の風ある人物なるにぞ一番の名望極て高し野村多仲より豫て花里曾次等が結城と示

丈夫松江國
懷懐及々

